

研修会

植物の分類について

田中玉枝（松戸市）

日 時 2015年10月16日（金）

場 所 小石川植物園（文京区）

講 師 山口 熙（森林インストラクター）

参加者 32名（指導員31名 会員外1名）、担当：田中玉枝

小雨の中だったが、多くの参加者があり、最初はヒマラヤスギのそばの雨よけのベンチで、資料を見ながらの講義。植物の分類はリンネの「自然体系による分類」から始まり、現在日本の多くの植物図鑑などで採用されている「新エングレー体系」に移行していった（アメリカなどではクロンキスト体系が主流という）。近年主流になりつつあるのが、今日のテーマであるAPG (Angiosperm Phylogeny Group)

分類(被子植物系統発生グループ)で、被子植物系統発生を研究するグループによって、葉緑体DNAの解析から、被子植物の分岐を調べて分類したもので、1998年Ⅰ、2003年Ⅱ、2009年Ⅲが公表されている。

これにより今まで独立した科となっていたものが他の科の属として編入され、科としては無くなってしまったものがある。例として、スギ科は無くなり、ヒノキ科スギ属に、親しんできたカエデ科も無くなり、ムクロジ科カエデ属になった。

同じ科だったものが分かれてしまったものもある。例えばユリ科の中のジャノヒゲ属やアマドコロ属など、いくつかの属はキジカクシ科に入った。キジカクシとはあまり聞かないどころか初めて聞いた時はなんじゃそれは？と思ったが、アスパラガスの仲間だそう。今まではユリの仲間だったのが、今度はアスパラガスの仲間に、何とも複雑な血縁関係である。

私の観察会の定番ネタだった《ニレ科三兄弟》が実は兄弟ではなかったという、本人も信じられない事実もある。(最近人間も親子関係を調べる人がふえているというが…)

ともあれ普段の観察会ではあまり神経質になることはないが、調査などで分類をするときにはAPG分類が避けられなくなってくるし、図鑑や植物園の名札なども変わってきているので、大変だが徐々に受け入れる必要があるということだ。

その後、分類標本園へ移動し(まだエングレー分類の植栽)、講師の力作である資料を基に標本園の見方と、今の標本園をAPG分類で植栽するとうなるという説明を受けた。

午後は花盛りのキイジョウロウホトトギスの花を鑑賞後、園内の特徴的な樹木、精子発見のイチョウやニュートンのリンゴ、御薬園名残のサネブトナツメ、常緑のメキシコラクウショウ、日本でここにしかないというフレッシュ ネイデラ フィネンシスを観察し、正門で解散となった。とっつきにくい難しい題材だったが、熱心な講師と、熱心な参加者とで充実した研修会になった。



ヒマラヤスギ林の雨避けベンチで研修会



キイジョウロウホトトギス